

國學院大學學術情報リポジトリ

博物館の中国文物特別展に見る日中博物館交流史の研究：
京都国立博物館での中国文物特別展示の回数と内容

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森, 廉華 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001514

博物館の中国文物特別展に見る日中博物館交流史の研究 —京都国立博物館での中国文物特別展示の回数と内容—

森 廉 華

論文要旨

論者は、日中学術交流史を研究テーマとし、中でも^{はくぶつかん}博物館・^{はくぶつかんがく}博物館学の交流の観点から東京国立博物館の特別展示に関しては、既に別稿で纏めている。

本論は、^{きょうとこくりつはくぶつかん}京都国立博物館での^{からもの}“唐物”^{ちゅうごくぶんぶつ}“中国文物”に関する^{とくべつてんじ}特別展示を通して、博物館における日中学術交流史を解明する目的で論述した。京都国立博物館の特別展(特別陳列・特別展観など含め)を大きく3期に分割し、第1期を開館年である1897年～第2次世界大戦終了直前までの1944年とし、第2期を終戦年である1945年～日中国交正常化年までの1972年とし、第3期を^{にっちゅうこくこうせいじょうか}日中国交正常化後の1973年～2020年4月までの3区分とした。

当該3期内的唐物・中国文物に関する特別展の頻度とその内容を一覧表に纏め、比較検討を行いそれぞれ3期の特徴を明確にすることに拠り、東京国立博物館の特別展との異質点を考えた。

はじめに

論者は、「日中学術交流史」を基本テーマとしており、その中で「日中博物館・博物館学の交流」の観点から、東京国立博物館における特別展示の歴史と内容を既に纏めている。^{註1}もちろん、博物館交流というならば、日中国交正常化以降の展覧会の開催に関しては、中国・日本の博物館がどのように関わったかと言った視点が不可欠であることは承知している。それには「展示開催企画書」などを基本とする、日中それぞれの渉外資料等々が必要であるが、入手が困難である。そこで、展覧会開催の結果である特別展回数と展示内容を、『京都国立博物館史』とそれぞれの特別展の展示図録を基本資料として纏めることとした。ただ、展示図録は、戦前期まではほとんど編纂されていなかったため、実情が把握しがたい場合が存在している点も明確となった。

本論は、京都国立博物館における“唐物”“中国文物”を中心とする中国資料に関する特別展示を取り上げ、論者の研究題目である「日中博物館・博物館学交流史」の全体的な構成を目的としている。論者が既に記した「博物館における日中学術交流史の研究—東京

国立博物館の特別展示を中心に―」^{註2}に続き、同一目的と基本的には同一研究方法で分館とも云うべき京都国立博物館での中国文物に関する特別展を分析した後、次いで奈良国立博物館・九州国立博物館へと論を進める予定である。

さらには、都道府県博物館での中国文物特別展の詳細を纏めることにより、研究題目である「日中学術交流史の研究」を構成する目的である。本研究に関する先行研究は確認されず、この意味で独創性に富んだ研究テーマであることは確認している。

本論では、京都国立博物館の特別展示を3期に分割し、第1期を開館年である1897年～終戦直前までの1944年とし、第2期を終戦年である1945年～日中国交正常化年までの1972年と定め、第3期を日中国交正常化後の1973年～2020年4月までと3区分した中で、日中博物館・博物館学の学术交流の歴史と実態・展示内容を検証しようとするものである。

なお、用語“唐物”“中国文物”の両者は、同義を指すともおもわれるが両用語の概念規定に不明瞭な点を一部残すところから統一せず、それぞれの場面によっては歴史的用語である“唐物”と、中国語に起因する“中国文物”の両者を使用している。

また、本論での「中国文物特別展」の概念は、第1義としては中国製の書画・書籍・陶磁・漆工品等々を主軸とした展覧会を指し、第2義は中国文物を展示意図に基づきある程度含んだ展覧会を考えている。仮に、中国文物を極一部でも含んだ展示となると、『皇国史展覧会』などは除いて上記の書画・書籍・陶磁・漆工品等々の歴史展示では必ずといえるほど認められるところから、埒外とした。

調査方法は、京都国立博物館の創設時から開催された特別展を一覧表作成段階では、“中国文物”に限定することなく、すべての特別展と収蔵品の特集である特別陳列を網羅し作成した。その結果、第1期の1897～1944年までの京都国立博物館での特別展開催数は168回、第2期の1945～1972年までの回数は209回、第3期の1973～2020年4月までの回数は404回と、総数で781回を数えた。従って、端的に表の行数は781行となるところからも決められた紙幅内には当然収まらないため、唐物・中国文物の特別展のみに限定して「唐物特別展一覧表」「中国文物特別展一覧表」とした。なお、京都国立博物館での全体の特別展開催表は、今後機を得て別稿で使用する予定である。

京都国立博物館の歴史と特別展の歴史・内容に関しては、『京都国立博物館六十年史』^{註3}『京都国立博物館百年史』^{註4}『京都国立博物館120年のあゆみ』^{註5}を基本文献として用いている。特別展覧会の内容に関しては、刊行されている『展示図録』の情報を分析し使用した。下記の京都国立博物館で開催された特別展覧会年表（特別展観、特別陳列等含む）は、同じく上記の3文献とそれぞれの特別展図録を参考に作成したものである。

第1章 京都国立博物館の創設と常設展示

第1節 帝国京都博物館誕生の時代背景

黒板勝美は、大正2年(1913)に「博物館建築に就いて」のなかで下記の如く記している。^{註6}

我邦に於ける博物館は先づ指を東京の帝室博物館と其の分館とも云うべき京都及び奈良の帝室博物館に屈すべきで、其の外には未だ博物館ともいふべき程のものは無いが、(後略)

上記を引用するまでもなく、京都は周知のとおり794年の桓武天皇による遷都から、1869年(明治2)の明治天皇による東京奠都までの間1000年以上にわたって、日本の政治・文化の中心地であった。京都国立博物館は、東京国立博物館の分館として日本で2番目に京都で建設された国立博物館であり、その落成は奈良帝室博物館よりやや遅れるが同時期に建設された国立博物館である。

京都は古都であり、古都と呼ばれる地には、歴史を物語る古寺社閣をはじめ国宝・重要文化財に指定されている古美術品などが数多く伝世していることが、日本の場合常である。それらの中でも、京都・鎌倉は唐物(中国文物)が多数伝存していることも周知のとおりである。

例えば、弘法大師(空海)が唐に留学した時に教えを受けた師であった恵果から授けられた袈裟である「七条綴織袈裟」(京都・教王護国寺蔵)は夙に有名である。そのほか「真言七祖像」(教王護国寺・東寺蔵)・「両界曼荼羅図(高雄曼荼羅)」(神護寺蔵)の原本もあり、これらも平安時代に入唐し真言密教を日本に伝えた弘法大師が持ち帰った資料であるとされている。

京都には最古の禅寺である建仁寺があり、1202年に中国で修業を重ねた僧侶栄西によって、日本へ初めて臨済宗を伝えて開かれた寺である。また、栄西は日本に茶を伝えたことでも知られ、これを契機として中国建窯産等の天目茶碗等々の“唐物嗜好”の一原因が形成されたことは、鎌倉・京都・博多等の遺跡の出土量からも窺える。

また、京都府宇治市には、日本禅宗を代表する三宗の一つである黄檗宗(臨済宗、曹洞宗)大本山の萬福寺があり、1661年に中国明代の高僧隠元(1592~1673)に拠って開山された寺である。建物と仏像様式をはじめ、儀式作法・精進料理に至るまで中国風である点も広く知られているところである。

すなわち、京都は古くからの中国との友好交流によって、博多と同様に宋人街が形成されるなど中国文化の影響を色濃く受けていたことが顕著に認められるのである。弥生時代

より、日本人は中国文物に憧れ、中でも中世には中国からの渡来品を“唐物”として珍重した上で日本の風土の中で咀嚼吸収し、日本独自の文化を生み出してきたことが京文化の一部に認められるのである。

2014年に京都国立博物館で開催された特別展“京へのいざない”の図録には、下記の如く明記されている。

京文化とはどのようなものであったのか、日本の文化とはどのようなものであったのか、その姿の一端をご覧いただき、それがまた次なる新たな文化を生み出す原動力ともなれば、それこそそれが文化財を守ることの持つ本来の大きな意味であり、役割でもある。^{註7}

京都国立博物館は、将に上記の役割を果たすために1897年に帝国京都博物館として開館した。開館以来、「古都」の1200年以上にわたる長い歴史の中で伝世してきた貴重な文化財を保護するために保存・収集・研究・展示を鋭意進めてきて、2020年（令和2）5月に123周年を迎えていた。

上述した如く、千年余を有する古都には、古寺社閣・古美術品等の歴史を物語る歴史資料・美術資料が数多く伝存している。それらの中には、“唐物”“中国文物”が多数遺存していることは歴然たる事実であることも上述したとおりである。

しかし、明治政府は、王政復古を目的に神仏習合の慣習を禁止すべく、慶應4年・明治元年（1868）に太政官布告・神祇官事務局達・太政官達などの一連の通達による神仏分離令・神仏判然令を発した。本通達により神道を国家の宗教と位置付けたところから、仏教に対する排斥運動が起こり、廃仏毀釈の風潮が蔓延し、仏像等宝物を破棄・廃棄される事態が発生した。

例えば、京都「方広寺の梵鐘」（1614年鑄造）も放置され野晒しになった。現在極めて貴重な文化財である東大寺の伝来什宝の、初唐に写書され請来された「天平写経」も当時は数巻が荒縄でくくられ、一束五円ほどの値で売られたりしたと伝えられている。また、現在世界遺産に登録されている1346年に赤松氏により築城が開始され、1580年に羽柴秀吉によって“姫路城”と名付けられた姫路城は100円で落札されたが、その取り壊し為の費用対効果の点で破壊から免れるなどの実例は多見される。^{註8}

このような状況の中で、多く識者から早期の「古器・旧物」の保存対策を求める声により、1871年（明治4）に「古器旧物保存方」の布告が太政官より発せられた。当該布告により、全国において日本の歴史を証左する宝物の現状把握を目的とした実態調査である「壬申調査」が全国を対象に実施された。1888年宮内庁内には、臨時全国宝物取調局が設置され、積極的に歴史資料・美術資料の保存・管理に乗り出すこととなったが、保存施設とし

ての博物館の建設には至らなかった。

さらに、全国的な古社寺宝物取調の結果により、京都には社寺の宝物が極めて多く、大半が破損、煙滅の危険にさらされている事実が判明した。調査員らによる宝物類の専門的保存施設の必要性が叫ばれたことを原因として、早急に国立の保存施設としての博物館建設の機運が醸成されることになった。

すなわち、明治政府は、京都の古寺社閣の建造物をはじめ、それらが所蔵する歴史・美術資料保存の必要性に対する重要性を痛感した。すなわち、文化の証としての文化財を守り、多くの人が鑑賞する重要性を認識したのであった。さらに、当該資料の保存施設として1889年には、「帝国京都博物館建設に関わる官制」が定められるに至ったのである。かかる経緯を経て帝国京都博物館は、1892年に着工し1895年に竣工の運びとなり1897年に開館し、古都京都の文化財保護の核として、砦としての帝国京都博物館は誕生した。

第2節 京都国立博物館の施設及び常設展の中国文物

京都国立博物館は、京都市街の東南角に相当する東山の山麓に位置し、七条通りに面した静謐な環境の中に所在する。約5万㎡の敷地の中に新旧二つの陳列館を擁し、丸池を中心とした大きな前庭と東南の丘の上にある庭園は、利用者の憩いの場になっている。敷地中央の西方に面して建つ赤レンガ造りの建物(3,015㎡)は、1895年に竣工し1897年に開館した当初の陳列館である。西南の外壁約150mと正門を含めて、明治の洋風建築の作例として重要文化財(1969年3月)に指定されている。^{註9}

1966年(昭和41)に新陳列館(8,569㎡)が増築され、日本・中国・韓国の優れた美術品で構成される常設展示が新陳列館に移設された。旧陳列館は、特別展覧会、共催展覧会等の大規模な特別展や企画展の会場に供された。

新陳列館の常設展示は、1階には先史・歴史考古・陶磁器・彫刻などの7室、2階には仏画・肖像画・絵巻・水墨絵・障屏画・近世諸派の絵画と中国絵画・書籍・染織・漆工・武具刀剣・金工などの10室で構成されている。動線に従って一巡すると、日本の美術に影響を与えた大陸および半島の資料を含む日本美術の全貌が鑑賞できるように配列されている。例えば、第3室には中国大陸や半島で製作された陶磁器を、年代や種類に従って分類展示がなされている。

中国の陶磁器については、古代の土器(彩陶)をはじめ、殷・周・戦国・漢・六朝・隋・唐時代の器物および墳墓に副葬された明器類をも展示している。中でも漢代の緑釉の鴨池、六朝の武人俑・唐代の唐三彩で白黒1対の三彩馬・狗を抱いた加彩婦人俑・伝洛陽北邙山出土の三彩明器一括(総数11点)等は、彫塑的にも大変優れた作品である。殊に、宋代以

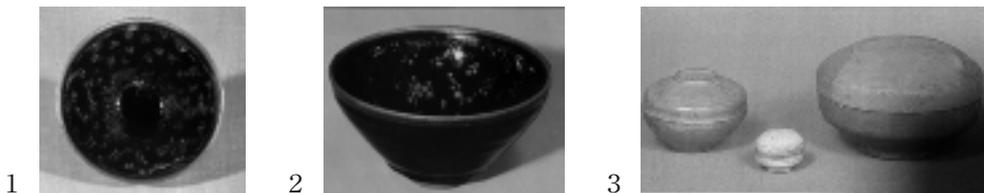
降の中国の窯業技術は、著しく発展し、中でも青磁・白磁・天目釉や磁州窯系の陶磁などと多彩な展開を見せている。これらは、時間軸による展示、あるいは青磁・白磁・黒磁といった種別に基づく分類展示を行なうことにより、見学者への注意の喚起と学術情報の確かな伝達を果たしている。

また、元時代以降になると、青花や五彩が陶芸の主流をなすようになる。これらもそれぞれの流れが把握できるように、時代別あるいは種別にまとめ、元・明・清時代までを時間軸で展示構成を行っている。

例えば、南宋時代（12～13世紀）の建窯の曜変天目茶碗（国宝）は、希観の名碗として中国でも名高く、現在静嘉堂文庫の稲葉天目・藤田美術館の曜変天目とともに3碗が知られており、生産地中国においても極めて貴重な資料とされている。つまり、当該3点はいずれも日本に遺存しているのみで、生産地の中国には残っていない資料であるところから、如何に日本人は唐物を嗜好し、その上で如何に大切に保存して来たかが窺える資料である。

さらに曜変天目は、稲葉天目ほど華やかではないが、内側に虹色の結晶群が多数見え、外側の漆黒地に七色の光彩が釉薬の中に見える。また、唐時代（9世紀）の越州窯・北方窯の青磁合子・白磁合子（重要文化財）は、日本出土の確実な資料としてその学術価値も高く評価されている。

新陳列館の常設展示で、中国文物を系統的に展示していること自体が、現在に続く日本人の“唐物嗜好”の現れ以外の何ものでもないと観察されるのである。



1. 国宝 曜変天目茶碗（京都龍光院） 2. 国宝 曜変天目茶碗（京都仁和寺） 3. 青磁合子・白磁合子（京都仁和寺）『社寺寄託名品図録』より転載

第2章 開館から第2次大戦終了直前までの特別展覧会

第1節 開館から終戦直前までの特別展（特別展観、特別陳列等含む）

開館年である1897年から、第2次世界大戦終了直前の1944年までの特別展示会は総数で168回実施され、その中での中国文物の特別展示は題名を主に判断して10回と、収蔵品の内容から2回の通算12回が数えられる。収蔵品の内容からとは、例えば「住友男爵家蔵古

銅器」展は、泉屋博古館の基礎となっている中国青銅器コレクションであろうし、「橋本関雪氏蔵第二回外邦古陶器展観」も画家橋本関雪は著名な中国古陶磁の収集家であった故である。

第二次世界大戦（1939年9月1日～1945年9月2日）では、アメリカ合衆国の古都保存思想に拠り、奈良・京都は空襲からも除外され、京都の歴史資料・美術資料は戦禍から保護されたことは僥倖であった。戦後の社会と人心が荒廃する中であたって、古都として保存された京都帝国博物館は京都国立博物館とその名を改称し、終戦より僅か3ヶ月後に逸早く開館していることにも驚かされる。

表1、1897～1944年までの唐物特別展一覧表（筆者作成）

番号	西暦	名 称	期 間
1	1901	和漢書画歴代対照展覧会	04/11～05/09
2	1907	開館十年記念和漢名画展覧会	04/01～05/31
3	1924	外邦古陶器展覧会	07/20～08/03
4	1925	桑名鉄城氏所蔵明清時代支那画展覧会	10/10～10/25
5	1926	支那花鳥画展覧会	06/01～06/15
6	1926	橋本関雪氏所蔵外邦古陶器波斯印度小画展観	10/10～10/30
7	1928	支那朝鮮古陶器	不明
8	1928	本邦及支那古代名画展	不明
9	1928	住友男爵家蔵古銅器展	不明
10	1930	橋本関雪氏蔵第二回外邦古陶器展観	09/20～09/30
11	1941	漢代画像石拓本（特別陳列）	06/01～06/15
12	1944	支那花鳥並京焼陶器（特別陳列）	06/01～06/30

1897～1944年までの特別展示会の合計数は、168回を数える。1898～1910年までの12年間の特徴は、年頭には「新年陳列」が行なわれていたが、1911年からは休止されている点の特徴の一つである。

その中での中国文物に関する特別展示は、以上の表に記載した12回である。168回の特別展示の中の唐物展示の開催率は7%であり決して多くは無いかもしれないが、展示題目から日本人が唐物展示と一見して理解できる展示を当該期において12回開催している点に注目される。

中国文物についての具体的展示物は、1928年の住友男爵家蔵古銅器展、1941年開催の漢代画像石拓本（特別陳列）を除くと、主に中国陶磁と中国書画である。それぞれの特別展示会を数えると、中国陶磁を主題とする特別展示会は1924年（7月20日～8月3日）の“外

邦古陶器展覧会”、1926年（10月10日～10月30日）“橋本関雪氏所蔵外邦古陶器波斯印度小画”展、1928年の“支那朝鮮古陶器”展、1930年（9月20日～9月30日）の“橋本関雪氏蔵第二回外邦古陶器”展、1944年（6月1日～6月30日）“支那花鳥並京焼陶器”展の5回である。

中国書画を主題とする特別展示会は、1901年（4月10日～5月9日）の“和漢書画歴代対照展覧会”、1907年（4月1日～5月31日）の“開館十年記念和漢名画展覧会”、1925年（10月10日～10月25日）の“桑名鉄城氏所蔵明清時代支那画展覧会”、1926年（6月1日～6月15日）の“支那花鳥画展覧会”、1928年の“本邦及支那古代名画”展、1941年（6月1日～6月15日）の“漢代画像石拓本”展の総数6回である。

其の外の特別展示会は、名称から判断すると“支那”の文字が記されていないとしても、特別展示会場で中国の古美術品が展示されているのは決して珍しくないのである。それらの展示品の多くは、日本国内へは平安・鎌倉・室町時代に舶載された資料群であり、さらにまた一部は江戸・明治時代以降にも舶載された資料である。

京都国立博物館は、開館時期である明治期から中国の古美術品を収蔵・保存・展示して来たことは、中国産工芸品の美術資料としての価値を認め思想的に工芸品から美術品に昇華させ、時間の経緯の中で中国古美術品として高い評価を与えてきた結果であろう。このような日本人の唐物への嗜好的感性を、特別展示を通じて日本人が中国の歴史、文化を理解してはじめて日中文化交流の基層の一つである日中博物館の学术交流が始まるものと考えている。

抛って、明治期から終戦直前までの京都国立博物館での中国文物についての特別展は、日中博物館・博物館学の学术交流の濫觴期と考える。

第3章 終戦年から日中国交正常化年までの特別展

第1節 1945～1972年までの特別展

終戦年である1945年から日中国交正常化が果たされる1972年までの特別展の回数は、総数209回を数え、その中で中国文物特別展は表2のとおり45回である。

先ず、終戦後の1945年11月には、室町時代より明治時代に至る各時代の花鳥画の優品を集めた“花鳥画特別陳列”が催されていることには驚かされる。1947年には、浮世絵約一千点を展示した“名作浮世絵展”と約四百点の絵巻を集めた“国宝絵巻物展”等の大展覽会を開催し絶賛を博し、この年の入場人数は126,601人に達したと記録されている。^{註10}

戦後初の特別展示は、占領下での初の特別展示でもあり、特別展の主題を見ても“花鳥

画特別陳列”“名作浮世絵展”“国宝絵巻物展”と題する日本的な美術資料を内容とした点が特徴であると指摘できる。

つまり、戦後間もない時期の特別展示の目的は、戦後の疲弊した社会の復興を目的としたであろう故の華やかさを齎すことと、第2点は展示の対象者は占領軍や軍属であるアメリカ人に対するの娯楽でもあり、且つまたそれは日本文化の世界への啓蒙でもあったと推定される。この点は、戦前期までの特別展が“東寺名宝展覧会”“長澤芦雪遺墨展”“石清水八幡宮資料展観”“石造美術拓本（特別陳列）”の如く、日本文化の中でも深化した内容であって、色彩的にも“地味”とも表現できる特別展であったに対し、戦後初の特別展示は上述の如く戦後社会の復興政策として、また外国人好みの豪華絢爛たる美術資料による美術展示であったと観察される点が特徴と考える。

したがって、日中両国に共通する美的思想と歴史感を有する中国文物に拠る歴史展示は、当該期には開催されなかったと考えられるのである。

表2、1945～1972年までの中国文物特別展一覧表（筆者作成）

番号	西暦	特別展覧会・特別陳列等名称	期 間
1	1948	中国古陶展	09/01～09/30
2	1950	上代緑釉陶資料展	07/16～08/31
3	1951	法然上人伝法画（特別陳列）	04/01～
4	1951	中国古陶展	05/01～6/30
5	1951	漢代画像石拓本（特別陳列）	06/10～7/
6	1952	国有東洋美術名品展（特別展）	05/01～05/20
7	1952	黄檗山萬福寺障壁画（特別陳列）	08/26～09/23
8	1952	中国古陶名品（特別陳列）	10/15～11/30
9	1952	中国絵画と書跡（特別陳列）	11/19～12/21
10	1953	中国金石文拓本（特別陳列）	01/06～01/30
11	1953	煎茶陶器（特別陳列）	02/10～03/31
12	1953	螺鈿を主とした漆工展観（特別陳列）	02/10～3/31
13	1953	仏と古瓦（特別陳列）	02/10～03/31
14	1953	宋陶枕（特別陳列）	03/10～04/30
15	1953	中国書画（特別陳列）	11/13～11/30
16	1954	和漢古典籍（特別陳列）	02/04～03/04
17	1954	中国石仏（特別陳列）	03/01～03/31
18	1954	中国古陶展（特別展）	04/10～05/30
19	1956	中国書画（特別陳列）	05/01～06/10
20	1956	雪舟	11/10～11/29
21	1958	宋代陶枕（特別陳列）	03/08～04/30

番号	西暦	特別展覧会・特別陳列等名称	期 間
22	1958	中国の絵画（特別陳列）	04/03～05/04
23	1958	明兆画蹟（特別陳列）	05/08～06/08
24	1959	隋唐美術	10/11～11/08
25	1960	中国古代美術名品展（特別陳列）	03/29～04/19
26	1960	記念受贈上野有竹齋中国書画展観（特別陳列）	04/01～04/20
27	1961	中国陶枕（特別陳列）	03/04～04/30
28	1961	室町時代画（特別陳列）	04/27～05/28
29	1964	画僧明兆の作品（特別陳列）	04/02～05/05
30	1964	吉備大臣入唐絵巻：石山寺藏（特別陳列）	11/15～11/23
31	1965	武氏祠堂画像石：拓本（特別陳列）	06/03～07/31
32	1966	中国書画：上野有竹齋蒐集 / 図録出版記念（特別陳列）	08/11～08/31
33	1967	中国の拓本：武氏祠と賓陽洞（特別陳列）	04/01～04/30
34	1967	宋元の書（特集陳列）	05/31～06/25
35	1967	室町時代の美術（特別展）	10/10～11/5
36	1969	北魏・龍門造像記の拓本（特集陳列）	10/01～10/19
37	1970	唐・宋の陶枕：文化財保護法施行20周年記念（特別陳列）	10/06～11/23
38	1971	萬福寺障壁画	06/02～07/04
39	1971	漢・六朝・隋の器物（特別陳列）	07/06～09/30
40	1971	宋・元の墨蹟（特別陳列）	09/25～11/28
41	1971	古鏡：中国鏡・和鏡・鏡箱と鏡台（特別陳列）	10/10～11/28
42	1972	唐三彩（特別陳列）	01/11～05/07
43	1972	ボストン美術館東洋美術名品展（特別展）	03/18～04/16
44	1972	東福寺所伝宋拓碑文（特別陳列）	06/08～07/23
45	1972	明兆の絵画（特別陳列）	07/04～07/30

以上の表2に記載した時間軸での特別展示会を確認すると、終戦年から日中国交正常化年までの28年間（1945～1972年）の特別展観・陳列を含めた特別展の合計数は209回で、その中で中国文物特別展は45回である。その中で、展覧会名には「中国」を明示する用語がない場合も中国文物特別展に含めた。例えば、1953年開催の“螺鈿を主とした漆工展観”では、展示出品リストには唐物の記載があることと、日本に遺存する鎌倉・室町時代の螺鈿製品の大半は舶載品であると言っても過言ではないところから中国文物展と判断した。

また、1956年の“雪舟”展では、これら雪舟の代表作をはじめ雪舟が影響を受けたといわれる中国の画家たちの作品までも集めた「雪舟展」であったところから同様に判断した。

開館から終戦直前まで（1897～1944年）の特別展と比較すると総特別展示数は41回増加し、中国文物特別展は33回増えていることとなる。中国文物に関する内容は、やはり中国陶器と中国書画を主たる内容にしている点が特徴と見られる。

第2節 特別展の状況と中国陶器の概要

中国陶磁に関する特別展示会は、終戦年から国交正常化年までの間に11回開催され、前述した開館時から終戦直前までの中国陶磁に関する特別展示会は5回であり、合計で16回開催されている。“中国古陶”と題する名称の特別展示会は、戦後の1948年（9月1日～9月30日）・1951年（5月1日～6月30日）・1952年（10月15日～11月30日）・1954年（4月10日～5月30日）の4回が開催されている。

また、“宋陶枕”・“中国陶枕”・“唐宋陶枕”・“唐三彩”と“陶枕”の資料名を冠した特別展示会と“唐三彩”の特別展示は、1953年（3月10日～4月30日）・1958年（3月8日～4月30日）・1961年（3月4日～4月30日）・1970年（10月6日～11月23日）・1972年（1月11日～5月7日）の5回に互り開催されている。

また、1950年（7月16日～8月31日）の“上代緑釉陶資料展”、1953年（2月10日～3月31日）の“煎茶陶器”展と銘打った中国製陶器特別展示会は、2回開催されている。

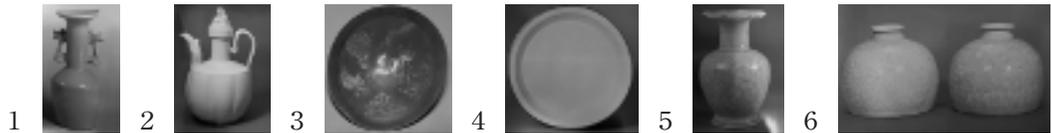
これほどまでに何故に中国陶磁が日本人を魅了する理由については、適切な表現ではないと思われるが、遺伝子的感性に起因すると言わざるを得ないのである。日本人が歴史的に嗜好した中国陶磁は、一般に八千年^{註11}の歴史を持っていると言われている。なかでも、唐三彩・宋代の青磁の陶磁器製作技術が極めて優秀であったところから、日本に限らず世界の陶磁に強い影響を与え、世界の陶磁界の牽引的な役割を果たしてきた。その中でも、日本の陶磁は、古くから中国陶磁の影響を強く受け、奈良三彩や瀬戸天目茶碗・有田焼青白磁／染付等に代表されるように、奈良時代から近代に至るまで、模倣と咀嚼吸収を繰り返し、換骨奪胎ともいえる技術的革新に成功した作陶の歴史を有する。

翻って中国では、“土器”なる呼称を使わずに“陶”と呼ぶのが習わしである。作陶技術は、大汶口文化期（BC,6000年）に完成している。中でも、多彩に装飾された彩陶を特徴とする仰韶文化は、（BC,5000年）に出現し、中国陶磁史の初期段階を飾る典型的な陶器となっている。

中国陶磁が頂点を極めたのは、宋時代であった。宋時代は、北宋と南宋の2期に分かれ、開封に都をおいた北宋（960～1126）は前半期であり、女真族の侵入により都開封を奪われ南遷した南宋（1127～1279）は後半期で、都は臨安（現杭州）であった。一般に、宋代陶磁を略して「宋磁」と称する。宋代の白磁窯を代表する窯業地は、南宋の杭州には修内司官窯・郊檀下官窯、華南に景德鎮窯（江西省景德鎮市）と華北に定窯（河北省曲陽県）などであった。

南宋官窯のどこまでも青い青磁に刺激され、同じ浙江省の龍泉窯は磁胎の青い青磁を作出し、日本でいう砧青磁を大量に焼造して日本を中心に輸出を行なった。中国陶磁の共通

点でもあるのだが、中国は常に生産地であり、輸出国であったことは龍泉窯・景德鎮窯には顕著に認められる。日本には、これら砧青磁の優作が多く伝世しており、いかに当時の権力者・文化人たちがこの青い青磁に魅了されたかを明示している。前記した“遺伝的感性”の萌芽は、遣唐使の時代に開始され、宋・元・明の時代の青磁・白磁をとおして醸成されたものと考えられる。



1. 国宝青磁鳳凰耳花瓶（龍泉窯南宋～元13世紀） 2. 白磁龍首水注（定窯北宋11世紀） 3. 柿釉金銀彩牡丹文碗（定窯北宋11～12世紀） 4. 白磁蓮花唐草文盤（定窯北宋11～12世紀） 5. 青白磁牡丹唐草百合口花瓶（景德鎮窯北宋11～12世紀初） 6. 青白磁牡丹唐草文瓶（景德鎮窯北宋11～12世紀初）『中国の陶磁図録』より転載

第3節 特別展の状況と中国書画の概要

中国書画に関する特別展は、終戦年から国交正常化年までの間17回開催されている。“中国書画”展は、1953年（11月13日～11月30日）・1956年（5月1日～6月10日）・1960年（4月1日～4月20日）・1966年（8月11日～8月31日）の4回に互り開催されている。“中国絵画”展は、1958年（4月3日～5月4日）に開催され、“宋元の書”と“宋・元の墨蹟”と題する展示名で、1967年（5月31日～6月25日）・1971年（9月25日～11月28日）に開催され、“中国絵画と書跡”展は1952年（11月19日～12月21日）4回に互り開催されている。

また、“漢代画像拓本”“中国金石文拓本”“中国拓本：武司祠と賓陽洞”“北魏・龍門造像記の拓本”“東福寺所伝宋拓碑文”と称する拓本展は、それぞれ1951年（6月10日～7月）・1953年（1月6日～1月30日）・1967年（4月1日～4月30日）・1969年（10月1日～10月19日）・1972年（6月8日～7月23日）の5回に互り開催されている。

また、“明兆の絵画”“室町時代画”と称する中国画展は、それぞれ1958年（5月8日～6月8日）・1961年（4月27日～5月28日）・1964年（4月2日～5月5日）・1972年（7月4日～7月30日）4回に互り開催されている。

以上の如く「中国書画・拓本」を主題とする特別展示の回数は、合計で17回の開催を数える。

日本の「書」は、弥生時代に始まる漢字の伝来以来、空海を筆頭に中国の強い影響を受けてきた。平安時代には、国風文化の成立と共に漢字から日本独自の文字である仮名が誕生した後も、漢字は日本人の教養・美意識を表現する文字として受け継がれ今日に至って

いる。

漢字の渡来に始まり、飛鳥時代から平安時代初期にかけて、王羲之を中心にした隋・唐の書風が移入された。当該書体は、格調の高い瀟洒で温雅な書風である。長い間に書の規範となり、大きな影響を与えた。これは中国書法の第一次の影響というべきものである。第二次の中国書法の移入があったのは、鎌倉時代から室町時代前期にかけて、新しく興った宗派である禅宗の渡来に伴った禅宗様の書で、鎌倉時代の宮廷や貴族・武士階級に浸透した。ことに宮廷では、その影響で宸翰様と呼ばれる宋風の雄渾な書風を誕生させるなど、日本の書も新たな展開を見せていた。^{註12}

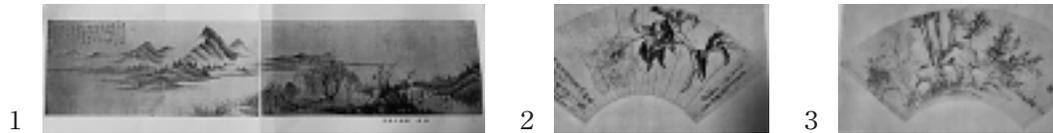
『唐様の書図録』には、「中国の書法は日本の書の成立の基盤となる共に、日本的な和様の書が成立してからも、深く、広く、日本の書に浸透していき、和様の書と織り成すかのように展開していった。」と記されている。^{註13}

中国「絵画」は、「書」とともに中国の長い歴史の中で独特な発達を遂げてきた造形芸術を代表する分野で、宋時代の絵画はその頂点をなしている。中国には「書画同源」「詩画一如」という伝統的な考え方がある。すなわち、「絵画」と「詩」は密接な関係であり、「書」と「絵画」は本来同じ根から発しているとする思想である。中国絵画は、書とともに日本に強い影響を与えてきた。日本の僧侶・文人・為政者・茶人らは、中国絵画を愛好したことにより、多くの中国絵画が輸入された。日本では“唐絵”と呼ばれ珍重され、殊に宋・元・明の絵画が重要視されたことは周知の通りである。

上記した「中国書画」の特別展示会は、総計17回も開催されている。例えば、その中に1960年4月1日～20日まで開催された“受贈記念上野有竹齋中国書画展観”では、大阪在住の上野精一が寄贈した163件に及ぶ中国明時代末期～清時代初期頃の著名な画家の古書画・法帖から、約50点の作品を選出して展示したといわれている。^{註14}

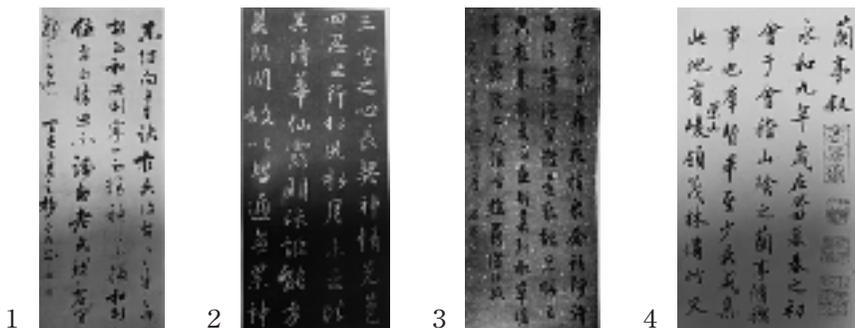
因みに上野精一は、明治・大正の両時代に互って朝日新聞社の経営に一生を捧げた経済人であり文化人であり収集家であって、自ら書室を有竹齋と名付けていたという。有竹齋に蒐集された中国の古美術品は、系統的に纏っているのが大きな特色で、その意味では優秀な収集家であり、結果的に優秀な収蔵品が形成された。

画の収集品の一例をあげると、重要文化財（1962年6月21日）に指定されている「花陽夕陽圖」は、清代の惲格（1633～1690）による作品である。惲格は、江蘇省出身で字は壽平と呼ばれ、号を南田という。明末期から清初期の六大画家の一人に数えられる絵師である。花陽夕陽圖は、惲が前に見た記憶を元にして、宋僧惠崇の絵に倣った39歳の作であり、惲格独特の色調と極めて瀟洒な情韻がみられる作品であると評されている。^{註15}



1. 国宝『花陽夕陽圖』惲格 2. 『新篁圖』惲格 3. 『牡丹圖』惲格
『受贈記念上野有竹齋中国書画展観図録』より転載

惲以外には、明代の著名な書道家唐寅（1470～1524）、清初の画家であった王暈（1632～1717）、明代の書道家であり画家であった邵寶（1460～1527）が代表される。書においては、清初の文人姜宸英（1628～1699）、清代中期の書家で『類羅庵論書』『類羅庵遺集』を著した梁同書（1723～1815）、清中期の政治家でもあった劉墉（1719～1804）などが著名である。



1. 臨王羲之帖（姜宸英） 2. 吳復古長生訣（梁同書） 3. 宋拓本集 4. 王羲之書聖教序元人詩（劉墉）『受贈記念上野有竹齋中国書画展観図録』より転載

第4節 中国の禅宗文化に関する特別展

中国の禅宗文化に関する特別展は、黄檗宗の内容を主題とする展示は終戦年から国交正常化年までの間2回開催されており、国交正常化後も続いて4回開催されて通算6回を数える。その中で、“黄檗山萬福寺障壁画”と題する特別展示会は、1952年（8月26日～9月23日）、“萬福寺障壁画”特別展示会は1971年（6月2日～7月4日）にそれぞれ開催されている。その後“萬福寺の障壁画”展は、1975年（7月30日～8月31日）、“萬福寺の近世絵画”展は1981年（9月30日～10月25日）、“黄檗美術”展は1993年、その後“黄檗— OBAKU 京都宇治・萬福寺の名宝と禅の新風”展は2011年に開催され、九州国立博物館へ巡回されている。黄檗宗そのものの哲学的本質についての特別展は、合計で6回開催されている。

抑々日本の新黄檗は、中国古黄檗を模範にしており、明時代末期の古黄檗復興へのキーワードは「祝聖道場」であった。その重要な出来事は、万暦神宗皇帝から、万暦42年（1614）に「勅賜黄檗萬福禪寺」の勅額、大蔵経他が下賜されたことである。神宗皇帝の聖壽無窮と、その治政による国の発展と安泰を祝祷祈願する道場となった。その意味で、日本の新黄檗も「本朝祝聖道場の亀鑑」と位置付けられ、「鎮護国家」の役割を担うことになったとされる。^{註16}

臨済宗・曹洞宗とともに日本三禪宗に数えられる黄檗宗は、1654年、仏法を世に広める弘法のため長崎に渡来した。黄檗宗の名は、唐の禪僧・黄檗希運（?～850年、黄檗山黄檗寺を開創・臨済宗開祖の臨済義玄の師）の名に由来するという。すなわち、黄檗宗は中国臨済宗の明僧隱元隆琦により始まった。隱元の渡日は、当初3年間の約束であり、中国からの再三の帰国要請もあって帰国を決意するが、1658年（万治元年）には、江戸幕府4代将軍・徳川家綱と会見した結果、1660年山城国宇治郡大和田に寺地を賜り中国と同名の黄檗山萬福寺と名付けた。隱元の禪は、正統派の臨済禪を伝えるという意味で臨済正宗や臨済禪宗黄檗派を名乗っていたが、既に日本に根付いていた臨済宗とは趣を異にし、その宗風は、明時代の中国禪の特色である華嚴宗、天台宗、浄土宗等の諸宗を反映した新しい禪の姿を伝えて、新しい一派を形成する方向に向かったものである。1876年（明治9）、黄檗宗として正式に禪宗の一宗として独立することとなった。^{註17}

黄檗宗の宗風の独自性は、黄檗僧が伝えた中国近世文化は、医学、社会福祉、文人趣味等の展開とも関係した、江戸時代における臨済宗・曹洞宗の戒律復興運動等にも貢献をしたという。

黄檗宗祖隱元禪師は、鑑真和上の伝える戒律法儀（南山律）を受け継ぐ「黄檗三壇戒」を戒律し、多くの僧侶と信者を受け入れたことにより“鑑真和上の再来”と称されたともいう。

『萬福寺境内図』は、重要文化財に指定された。隱元隆琦揮毫による扁額「松隱堂」「黄檗山」「萬福寺」、隱元隆琦による三門木聯「地關千秋日月山川同慶喜」「門開萬福人天龍象任登臨」等も同じく重要文化財に指定されている。

1952年の“黄檗山萬福寺障壁画”の特別陳列を通して、黄檗宗（禪僧文化）と黄檗山萬福寺についての歴史および身近な黄檗文化に由来するものを展示することにより社会に印象付けられた。所謂、日本における煎茶道の開祖とされ、隱元豆、寒天の名称に名を残した黄檗宗祖隱元禪師は、明代の書をはじめ当時の中国文化、文物等を伝えたことである。

また、黄檗山における『鉄眼版大蔵経』や『諸師語録』の印刷刊行により、印刷活字である「明朝体」が生まれたことも知られた事実である。木彫活字であるが故に、角々しい

特徴を有している点が今日の明朝体である。黄檗宗祖隠元禅師は弟子の木庵性瑫・即非如一と三人いずれも書道の達人で、ともに「黄檗の三筆」と称される。

これらの禅宗文化の特別展覧会という、文物に限った展示ではなく広く仏教哲学の展示に及んだことは、特別展示に関する従来の考え方に变革を齎す展示であったと指摘できよう。つまり、鑑賞展示から学術展示への移行の萌芽であったと考えられる。

終戦年から日中国交正常化年までの京都国立博物館での特別展は、中国文物特別展の発展期と考える。

第4章 日中国交正常化後の日中博物館の学術交流

第1節 日中国交正常化後の特別展

1973年の日中国交正常化後、京都国立博物館も東京国立博物館も同様に中国文物に関する特別展は、本格的に開催される傾向が認められた。当該期での第1回特別展は、“中華人民共和国出土文物展”であり、1973年6月9日～7月29日まで東京国立博物館で開催後、8月11日～9月30日まで京都国立博物館で開催された巡回展示であった。

第2回特別展は、“中華人民共和国古代青銅器展”で、1976年3月30日～5月23日まで東京国立博物館で、続いて6月15日～8月8日まで京都国立博物館で開催されるなど、当該期より中国文物展示に限らず東京国立博物館から京都国立博物館への巡回展示が一般化となる傾向が看取される。このことは、美術梱包・輸送専門業者の充実に関係するものと推定される。

表3、1973～2020年4月までの中国文物特別展一覧表（筆者作成）

番号	西暦	名 称	期 間
1	1973	中国の染織：伝法衣（特別陳列）	04/01～05/27
2	1973	中華人民共和国出土文物展（特別展）	08/11～09/30
3	1973	宋元画と禅院額字（特別陳列）	08/11～09/30
4	1975	中国鏡：黒川コレクション（特別陳列）	07/05～08/10
5	1975	萬福寺の障壁画（特別陳列）	07/30～8/31
6	1975	中国古銅器：黒川コレクション（特別陳列）	08/15～09/15
7	1976	中華人民共和国古代青銅器（特別展）	06/15～08/08
8	1978	東洋陶磁展：安宅コレクション（特別展）	01/05～02/19
9	1979	中国の美術：館蔵品を中心に（特別陳列）	03/20～05/20
10	1979	パリ・ギメ美術館東洋美術の秘宝（特別展）	10/09～11/25
11	1980	英国デヴィッド・コレクション中国陶磁展（特別展）	07/22～08/31

番号	西暦	名 称	期 間
12	1981	東洋美術展：細川家コレクション（特別展）	03/31～05/05
13	1981	萬福寺の近世絵画（特別陳列）	09/30～10/25
14	1981	中国の羅漢・十王図（特別陳列）	09/30～10/25
15	1982	中国の書（特別陳列）	09/29～10/31
16	1983	弘法大師と密教美術：入定1150年（特別展）	03/19～05/05
17	1984	中国古代の俑：館藏品を中心に（特別陳列）	11/15～03/10
18	1985	中国陶俑の美（特別展）	01/05～02/24
19	1991	色絵祥瑞・南京赤絵・康熙五彩：明末清初の五彩陶磁	10/08～11/10
20	1991	日本人が好んだ中国陶器（特別展）	10/08～11/10
21	1992	ベルリン東洋美術館名品展：東西ドイツ統一記念（特別展）	06/30～08/02
22	1993	黄檗の美術：江戸時代の文化を変えたもの / 文化庁創設25周年記念（特別展）	10/05～11/07
23	1995	東洋美術展：サンフランシスコ・アジア美術館所蔵（特別展）	10/17～11/26
24	2000	中国の書画：上野コレクション寄贈40周年記念（特別陳列）	02/02～03/05
25	2001	新収品展Ⅱ須磨コレクションの中国美術（特別展観）	10/31～翌年03/24
26	2002	雪舟：没後500年	03/12～04/07
27	2002	建仁寺：京都最古の禪寺 / 栄西禪師開創800年記念（特別展）	04/23～05/19
28	2002	日本人と茶—その歴史・その美意識—（特別展）	09/07～10/14
29	2003	空海と高野山：弘法大師に入唐1200年記念	04/15～05/25
30	2005	最澄と天台の国宝：天台宗開宗1200年記念（特別展）	10/08～11/20
31	2011	上野コレクション寄贈50周年記念筆墨精神・中国書画の世界	01/08～02/20
32	2012	中国近代絵画と日本	01/07～02/26
33	2013	魅惑の清朝陶磁	10/12～12/15
34	2015	中国陶器	04/22～06/15
35	2017	開館120周年記念 国宝	03/17～09/06

当該期の特別展の回数は、404回を数え、その中で上表の如く中国文物についての特別展開催数は35回である。

1973年国交正常化後の中国文物の特別展の内容は、従来の特別展とは基本的に異なり、中国からの借用資料で構成される点が大きな特徴である。したがって、戦前期の特別展示に供された資料は、中国から舶載以降の日本国での歴史は有するが、収集された個々の単発的な資料であることもあって、基本的学術情報は脆弱な資料が多いことは一般的であった。

この様な情勢の中で、日中国交正常化以前の展示は、青磁や天目茶碗であっても美術展

示のみに留まっていたものが、種々の学術情報を加味した本格的な歴史展示へと変化した点が指摘できよう。なかでも、前述した中国からの借用による資料は、従来の唐物展示は国内での遺存数は限られたものであって、それを特別展の名称の変更や組み合わせを変えるなどの所謂“切り口”を変えた展示構成であったに対し、それらは日本ではじめての展示であったが故に、多くの日本人に驚きと発見を齎す結果となった。

国交正常化に伴う具体的展示は、中国からの借用資料に拠る長砂馬王堆一号墓の展示であった「中華人民共和国出土文物展」に代表される如く、出土地・伝世地をはじめとする基礎的学術情報を多量に有している点が大きな資料特質である。「中華人民共和国出土文物展」からも明確であるように、美術展示から歴史展示が可能となったことが、中国文物の展示の上での特質であったと指摘できる。さらに、中国との共催であるところからも明らかのように、本格的な日中学術交流に基づく具現化された特別展示がここに開始されたのである。

なお、当該期の特別展の総回数が404回に対し中国文物展が35回と開催数が少ない原因は、1970年中頃より都道府県をはじめ、中核都市は中国の省・市との“友好都市”締結が盛んとなり、これに伴い1980年代には都道府県立博物館・美術館や中核都市立博物館・美術館での中国文物展が盛んに実施されたことに起因すると考えられる。つまり、中国文物特別展は、中央から地方への拡散が開始されたのであり、本現象に伴い日中博物館・博物館学交流も拡大したものと考えている。

さらなる原因は、京都国立博物館は東京国立博物館とは異なり、前述してきたように古都京都を社会背景に置くところから、日本での伝世資料であるいわゆる唐物の展示が選択されたものと推定される。事実、35回の特別展示の中で、約30回は唐物に主題を置く展示となっている。

当該期の特別展の内訳は、“中国陶器”（8回）をはじめとし、“中国書画”（7回）・“禅宗の美術”（7回）・“中国の美術、東洋美術”（5回）・其の外“中華人民共和国出土文物”・“中華人民共和国古代青銅器”・“中国の染織”・“中国鏡”等（7回）である。国交正常化に伴い本格的な文物移動を通じた博物館交流日本全国で開始され、当該期は特別展示の内容と中国の博物館との共催展示が多くなった点から判断して、日中博物館学術交流上での変革期であり隆盛期であったと考えられる。

第5章 120周年記念“国宝”に関する特別展の状況

“国宝”と題する特別展では、展示品の全てが国宝であり、200件を超える作品が展示さ

れ、それぞれが歴史や美を語る上で欠かすことができない作品であった。その中に中国文物は48件73点が含まれている。これらは、最高級と日本において評価された中国から日本への輸出品、つまり唐物である。

上述の特別展示会では、名称から中国の文物展でなくても、特別展示会場で中国での制(製)作による書画・陶磁器等が展示されていることは珍しくはない。

当該“国宝”特別展は、京都国立博物館の開館120周年(1897年5月～2017年)の記念事業の一環中での特別展であった。その国宝の中に中国文物は、多数含まれているのである。

『国宝図録』によると、日本の国宝は、総計1800件(平成29年9月現在)であり、そのうち美術工芸品は885件である。なかでも海外でつくられた作品は、126件あり、その内訳は中国122件、朝鮮2件、欧州などが2件で外国産品は全体の1割強を占めている。この数字から見ると、日本への渡来品の大半が中国からの“唐物”であり、最も多いのが書で約60点、次いで絵画28点、陶磁の8点を数えている。^{註18}

何故、“唐物”である中国産文物が日本の国指定文化財である重要文化財・国宝に指定されるかを問い直すことによって、日本文化とは何かを問うことになるとも考える。文化財保護法によると、『国宝』とは、日本の歴史を物語る「国の文化を象徴する諸事のエッセンスが最も見事に現れたものである。」「国宝」の指定基準は文化財保護法で示されている「我が国の文化の発展・展開に決定的に影響を与えた外来品」と明記されている。すなわち、「国宝になった渡来品は、長い歴史のなかで諸外国との交流により日本にもたらされ、日本の生活・文化等々の発展に関与した作品である。」^{註19}と記されている如く、これ等の資料群の製作地は外国であっても日本にもたらされた背景・思想、社会情勢・生活習俗等々の中で日本人が関与した、あるいは日本人に影響を与えた歴史資料・美術資料なのである。

2017年の120周年記念“国宝”の特別展で展示された210件に及ぶ国宝の中での唐物・中国文物は前述したように48件73点であり、それらを纏めたのが下表である。

表4、京都国立博物館「120周年記念“国宝”」展図録唐物一覧表(筆者改変)

番号	国宝名称	数	作者	材質	時代・世紀	所蔵機関
38	無準師範像	1	自賛	絹本著色	南宋1238年	京都・東福寺
65	孔雀明王像	1		絹本著色	北宋・11～12	京都・仁和寺
66	十六羅漢像	16		絹本著色	北宋・11～12	京都・清凉寺
67	阿弥陀三尊像	3	普悦	絹本著色	南宋・12～13	京都・清浄華寺
68	山水図	2	李唐	絹本墨画	南宋・12	京都・高桐院
69	夏景山水図	1	胡直夫	絹本著色	南宋・13	山梨・久遠寺

番号	国宝名称	数	作者	材 質	時代・世紀	所蔵機関
70	秋景冬景山水図	2	徽宗	絹本著色	南宋・13	京都・金地院
71	瀟湘臥遊図巻	1	李氏	紙本墨画	南宋・12	東京国立博物館
72	風雨山水図	1	馬遠	絹本墨画淡彩	南宋・13	東京・静嘉堂文庫美術館
73	秋野牧牛図	1	閻次平	絹本著色	南宋・13	京都・泉屋博古館
74	婦牧図附牽牛	1	李迪	絹本墨画淡彩	南宋・12~13	奈良・大和文華館
75	紅白芙蓉図	1	李迪	絹本著色	南宋・1197年	東京国立博物館
76	鶉図	1	李安忠	絹本著色	南宋・13	東京・根津美術館
77	林檎花図	1	趙昌	絹本著色	南宋・13	東京・畠田記念館
78	出由釈迦図・雪景山水図	3	梁楷	絹本墨画淡彩	南宋~元・13~14	東京国立博物館
79	観音猿鶴図	3	牧谿	絹本墨画淡彩	南宋・13	京都・大徳寺
80	六祖挾担図	1	直翁・	紙本墨画	南宋・13	東京・大東急記念記念文庫
81	宮女図（伝桓野王図）	1		絹本著色	元・13~14	個人
82	禅機図断簡（丹霞焼仏図）	1	因陀羅	紙本墨画	元・14	東京・石橋財団プチストン美術館
83	禅機図断簡（智常禅師図）	1	因陀羅	紙本墨画	元・14	東京・静嘉堂文庫美術館
84	禅機図断簡（寒山拾得図）	1	因陀羅	紙本墨画	元・14	東京国立博物館
91	兜跋毘沙門天立像	1		木造彩色	唐・9	京都・教王護国寺（東寺）
92-1	釈迦如来像立像	1		木造彩色	北宋・985年	京都・清凉寺
98	金銅錫杖頭	1		銅製	唐・8	香川・善通寺
112	青磁下蕪花入	1		陶磁	南宋・13	東京・アルカンシエール美術館
113	青磁鳳凰耳花入	1	銘万声	陶磁	南宋・13	大阪・和泉市久保惣記念美術館
114	飛青磁花入	1	龍泉窯	陶磁	元・14	大阪市立東洋陶磁美術館
115	曜変天目	1	建窯	陶磁	南宋・12~13	京都・龍光院
116	油滴天目	1	建窯	陶磁	南宋・12~13	大阪市立東洋陶磁美術館
117	玳瑁天目	1	吉州窯	陶磁	南宋・12	京都・相国寺
120	刺納衣	1		絹	隋・6	滋賀・延暦寺
122	四騎獅子狩文様錦	1		絹	隋~唐・7	奈良・法隆寺
123	七条刺納袈裟	1		麻	唐・8	滋賀・延暦寺

番号	国宝名称	数	作者	材 質	時代・世紀	所蔵機関
124	七条綴織袈裟毘陀 穀糸袈裟	1		絹	唐・9	京都・教王護国寺
125	唐花文様横被	1		絹（文綾）	唐・9	京都・教王護国寺
141	伝教大師請来目録	1	最澄	紙本墨書	唐・805年	滋賀・延暦寺
174	真草千字文	1	智永	紙本墨書	隋・7	
175	搦王義之書	1	孔侍中	紙本搦模	唐・7～8	東京・前田育徳会
176	漢書楊雄伝	1	第57	紙本墨書	唐・7	京都国立博物館
177	宋版後漢書（慶元 刊本）	1	第1・58 冊	紙本木版	南宋・12	国立歴史民俗博物館
178	徽宗文集序	1	宋高宗	紙本墨書	南宋・1154年	文化庁
179	尺牘（板渡しの墨 蹟）	1	無準師範	紙本墨書	南宋・1242年	東京国立博物館
180	金剛経	1	張即之	紙本墨書	南宋・1253年	京都・智積院
182	墨蹟（「月林」道号）	1	古林清茂	紙本墨書	元・1327年	京都・長福寺
183	墨蹟（易元吉画卷 跋）	1	馮子振	紙本墨書	元・14	東京・常磐山文庫
192	金銀錯狩獵文鏡	1	洛陽出土		戦国・前4～3	東京・永青文庫
193	金彩鳥獸雲文銅盤	1	中国出土	銅製	漢・前3～後3	東京・永青文庫
198	金印	1	光武帝	金製	弥生・1	福岡市博物館
206	伝菅公遺品 銀装 革帯	1			唐・9	大阪・道明寺天満宮
	伝菅公遺品 伯牙 弹琴鏡	1			唐・9または日 本の平安	大阪・道明寺天満宮
	青白磁円硯	1			唐・9	大阪・道明寺天満宮

以上の如く、国宝展示会で展示された国宝の中には、唐物が多数含まれており、これらは日本各地で出土・出土伝世・伝世により現在に遺存した資料である。

例えば、178番の「徽宗文集序」は、中国南宋随一の優品で南宋初代皇帝の高宗（在位1127～1162）の現存唯一の自筆であるとされている。高宗は、南宋を代表する能書家として知られ、父である徽宗（在位1100～1125）北宋第8代皇帝の文集である『徽宗皇帝御集』に自撰自書した序文が上記の「徽宗文集序」である。^{註20}

つまり、本資料は日本に伝世しているのみで、中国では残っていない資料である。この点は本資料に限らず、日本人は唐物の優品をもとめた上で珍重するにとどまらず、日本人が持つ経験科学（伝統的資料保存意識）でそれぞれの資料の材質に則した環境を創出し、保存して来た事実を再度確認できる資料の一つである。

また、198番の「金印」は、福岡県志賀島出土の一辺2.3cmほどの方形印で、重さは108

gを量り単体の国宝としては法量的には最も小さい資料である。後漢の光武帝が、建武中元2年（紀元後57）に倭の奴国の使者に授けたとされる金印で、蛇紐をもち印面には「漢委奴國王」の5文字が篆書で刻まれていることは、日本の教科書にも掲載されているところから周知されている国宝である。

以上に代表される如く、日本の国宝の中にも弥生時代から室町時代までの間に舶載された48点の中国産文物が含まれていることから、日本の基層文化形成に果たした影響は尋常でないことが窺えるのである。

まとめ

京都国立博物館での特別展示は、1897年の公開展示から2020年4月の特別展“西国三十三所草創1300年記念聖地をたずねて—西国三十三所の信仰と至宝—”までで、781回の多き数える展示会が開催されてきた。その中で中国資料に関する特別展は、92回以上の開催が数えることが判明した。

本論では、京都国立博物館の特別展示を3期に分割し、第1期を開館年である1897年～終戦直前までの1944年とし、第2期を終戦年である1945年～日中国交正常化年までの1972年とし、第3期を日中国交正常化後の1973年～2020年4月までの3区分した中で、日中博物館・博物館学の学术交流史の検証を目的に論じた。

第1期である1897～1944年までの特別展示会の合計数は、168回を数え、その中で唐物に関する特別展示は12回であった。唐物特別展の開催率は7%であり、決して多くは無いかもしれないが日本人が唐物展示と理解できる展示を当該期において12回開催している点が注目される。京都国立博物館は、開館時期である明治時代中期から中国の古美術品を収蔵、展示して来たことは、中国産工芸品の美術資料としての価値を認め、日本では工芸品から美術品に昇華させ、中国古美術品として高い評価を与えてきたことが理解できた。

また、第1期とした明治期から終戦直前までの京都国立博物館での中国文物についての特別展は、日中博物館の学术交流の濫觴期と考えた。

第2期の終戦年から日中国交正常化年までの28年間（1945～1972年）の特別展観・特集陳列含めた特別展の合計数は209回で、その中で中国文物特別展は45回である。開催率は、21%であった。開館から終戦直前まで（1897～1944年）の特別展と比較するとその数は41回と増加している。全体回数の増加もあって第1期と比較して中国文物特別展は33回増えている。中国文物展の内容は、やはり第1期と同じく中国陶器と中国書画を主たる内容にしている点が特徴と見られた。当該期は、特別展全体の増加も相俟って、発展期であると

結論した。

第3期である1973年国交正常化後から2020年までの48年間の特別展の総回数は、404回を数える。この特別展示数を以てしても、当該期の日本の博物館の発展を窺い知る。その中で、中国文物の特別展数は35回であり、開催率は8%で第2期の21%と比較し極めて少なく、第1期の7%とほぼ同様である。

当該期の一部の特別展示の内容は、従来の特別展とは基本的に異なり、中国からの借用資料で構成されている点で大きな違いが認められた。つまり、第1期である戦前期の特別展示に供された資料は、生産地中国から船載されて以降の日本での歴史は有するが、収集された単発の個々の散発的な資料であることもあって、持ち合わす学術情報は脆弱な資料が多いことは一般的であった。したがって、日中国交正常化以前の展示は、青磁や天目茶碗であっても美術的展示のみに留まっていたものが、種々の学術情報を加味した歴史展示へと変化をもたらした点が当該期の変化の特徴である。

なお、当該期の特別展の総回数が404回に対し中国文物展が35回と開催数が少ない点は、以下の2点が考えられる。

第1点は、1970年中頃より都道府県をはじめ、中核都市は中国の省・市との“友好都市”の締結が盛んになり、これに伴い1980年代には都道府県立博物館・美術館や中核都市立博物館・美術館での中国文物展が盛んに実施されたことに起因すると考えた。つまり、中国文物特別展は、中央から地方への拡散が開始されたのであり、本現象に伴い日中博物館・博物館学交流も拡大したものと考えた。

第2点は、京都国立博物館は東京国立博物館とは異なり、古都京都を社会背景に置くところから、日本での伝世資料であるいわゆる唐物の展示が選択されたものと推定される。事実、35回の特別展示の中で、約30回は唐物に主題を置く展示となっている。この点に関しては、東京国立博物館と異なり、特別展の企画に対する思想・社会的嗜好のみではなく、各展示の内容構成・具体的展示方法・予算・特別展示場の面積等々物理的要因も見極めなければならない。また、関係雑誌での評論や新聞報道等々を博捜し、各特別展示に対する利用者側の評価等は、今後の課題とする所存である。

当該期の中国文物特別展は、日中博物館学術交流上の変革期であり隆盛期であると考えた。

おわりに

京都国立博物館の常設展示及び特別展示から、京都の唐物嗜好を具体的に確認できた。

中でも、全国的見地では1973年の日中国交正常化以降の中国文物特別展のあり様は大きく様変わりし、さらに学術的博物館展示へと進捗したことが確認できた。しかし、京都国立博物館の実相は東京国立博物館の中国文物の特別展とは異なっていた。次いでは、奈良国立博物館・九州国立博物館の中国文物特別展の調査をおこない、その上で日本の都道府県と中国との友好都市との中国文物特別展の歴史と実態を調査する所存である。

日中博物館・博物館学の学術交流の発展、日中両国民の相互理解と友好を深め、日本と東アジア及び世界の平和と繁栄に貢献することを願うものである。

註

- (1) 森廉華「博物館における日中学術交流史の研究—東京国立博物館の特別展示を中心に—」『國學院大學博物館紀要』第44輯
- (2) 同上
- (3) 京都国立博物館1957年『京都国立博物館六十年史』
- (4) 京都国立博物館1997年『京都国立博物館百年史』
- (5) 京都国立博物館2017年『京都国立博物館120年のあゆみ』
- (6) 黑板勝美1913「博物館建築に就いて」『建築世界』7巻8号・青木豊『明治期博物館学基本文献集成』2012年雄山閣 p.361
- (7) 京都国立博物館2014年『京へのいざない図録』挨拶文
- (8) 京都国立博物館2014年『京博が新しくなります』 p.14
- (9) 京都国立博物館2017年『京都国立博物館120年のあゆみ』 p.28
- (10) 京都国立博物館1957年『京都国立博物館六十年史』 p.58
- (11) 東京国立博物館1994年『中国の陶磁図録』 p.239
- (12) 東京国立博物館1996年『唐様の書図録』 p.118
- (13) 註11とおなじ
- (14) 京都国立博物館1960年『受贈記念上野有竹齋中国書画展観図録』挨拶文
- (15) 京都国立博物館1960年『受贈記念上野有竹齋中国書画展観図録』 p.3
- (16) 九州国立博物館2011年『黄檗—OBAKU 京都宇治・萬福寺の名宝と禪の新風図録』 p.25
- (17) 黄檗宗・黄檗希運・萬福寺の Wikipedia
- (18) 京都国立博物館2017年『国宝図録』 p.17
- (19) 註16とおなじ
- (20) 京都国立博物館2017年『国宝図録』 p.384